

自然の中で 野外教育情報

2015 | 第 **1** 号 ◆今号の特集◆ 「身近な場所で気楽に楽しむ」

平成27年1月30日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

リニューアルにあたって

野口 和行

(日本教育科学研究所自然体験活動推進委員)

日本教育科学研究所では、子どもたちの心身の健全な育成に自然の中での体験活動が大きな役割を果たすという思いを持ち、誰でも手軽に指導できるように工夫された野外教育の教材「アイオレシート」を提供し、指導者のための「アウトドアゲーム指導法講習会」を実施してきました。

このたび、さらなる自然体験活動の推進のために新たな試みに取り組んでいきます。その一環として、これまで書籍スタイルとしてお届けしていた「野外教育情報」を、ニュースレター形式の情報誌(年2回発行)としてリニューアルします。そのコンセプトは、次のとおりです。

① 手軽に手にとって読んで頂けるニュースレターを目指します。

短い時間でも手軽に手にとって読んで頂けるように、ひとつの記事をコンパクトにします。記事の内容も指導者の方々にとって身近で、すぐに役立つようなものにしていきます。これまでの研究者から、現場で精力的に活動している方まで、さまざまな方々に執筆をお願いしていきます。

② フェイスブックや研究所のウェブサイトと連携していきます。

これらの記事は随時フェイスブックに投稿されます。記事の内容としては、①小特集のテーマに沿ったエッセイ、②アイオレシートの活用事例、③アイオレシートの解説、④講習会等の案内や報告、⑤研究所からのお知らせ、等を予定しております。フェイスブックに投稿された内容が半年に1回、ニュースレターとして1冊の形になります。

③ 自然体験活動に興味のある方に幅広くお届けできるようにします。

これまで通り、教育センターや教育委員会、大学、青少年教育施設等に配布するとともに、ホームページにおいてPDF形式でも発信し、興味のあるすべての方にお届けできるようにします。

新しい「野外教育情報」誌をどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私と息子の自然体験



小澤 潤平

私には2歳の息子がいる。東京の区内に在住して、近くの保育園に通っている。

私は自然に携わる仕事をしていながら、都会の中で自らの子どもにどのようにして自然に親しむ環境を作ればよいのか、いつも悩んでいる。

仕事では関わる子ども達といかに楽しく自然の中で過ごすか、その後も自然との触れ合いを大事にしてもらえるか、そんなことを考えているが、育児となると少し違った。

仕事ではアウトドアに出かけていくが、育児をするときは行こうとしなければアウトドアへ出てはいかないし、普段から身近に自然があるわけではなかったからだ。

しかし、自分の息子には自然に触れてもらいたいと願っていた。そう考えると、『身近な自然』に触れることが現実的であり、無理なくできる自然体験だと考えた。

家の近くには大きな都市公園があり、休みには息子と一緒に出掛ける。そのとき、葉っぱで遊んだり、枝を拾ったり、どんぐりを拾って「どんぐりころころ」とうたったり、林の中に入って探検

をしたり。

なるべく好きなように遊ばせると、進んで自然に触れていくのに気が付く。

虫を見つけ

ては追いかけ、セミの抜け殻をみつけると集め、楽しそうに笑っている。この様子をみると、身近な自然でできることはたくさんあることに気が付いた。

レイチェル・カーソンの『センス オブ ワンダー』の中に、こんな一節がある。

『子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきかを悩ませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。』

私は、自分の息子に身近でできる『自然を感じる』を大切にしたい育児をしていきたい。

四季の自然を、肌で感じてもらいたい。自然の色を、見てもらいたい。草花のおいを、感じてもらいたい。もちろん、できる限り大自然も感じてもらいたいとは思っている。

でも、片意地張らずに、できることからやっていきたい。それが、私と息子の自然体験だ。



● 小澤 潤平 [おざわ じゅんぺい]

野外教育事業所ワンパク大学ディレクター

東京都新宿区生まれ。順天堂大学スポーツ健康科学部卒業。1児の父として、仕事と育児の両立を目指して日々を過ごしている。現在は「スポーツ」と「自然学校」をテーマに、今後のあり方を模索、「影響を与え、流れを変える」生き方を実践している。

身近なプログラム



酒井 妙子

私達が活動している場所は、都会の真ん中の公園だったり、住宅街に残された小さな森です。異年齢の子ども集団であったり、障害のある子どもたちであったり、時には世代を超えた人たちとの交流であったり、様々な形で、様々な人が集まり、様々な活動を展開しています。活動を始めて概ね20年。

テーマはいつも「楽しい出会い、新しい発見」、そして「めっちゃオモロイ遊び場つくろう！」でした。人が「あーおもしろかった。またやりたいな。また来たいな。」と思える時には、必ず心が動かされるような出会いや発見があり、面白いと感じる気持ちは、意欲を引き出し生きる力につながっていると思えるからです。

普段のプログラムはというと、牛乳パック、ペットボトル、どんぐりや落ち葉といった身近な素材を使ったクラフト、いつも遊んでいる身近な公園で行きかう車を横目で見ながらのウォークラリー、昔はアスファルト敷きの駐車場だった遊び場の一面を掘り耕してつくる菜園活動、森に残された池のゴミ拾い等、さほどめずらしくもない日常的で身近な環境を利用したものばかりです。

なので私達大人は、もっと雄大な自然の中で夢や冒険にあふれたプログラムをと考えて毎年数回に渡り大型バスを借り切り、2泊3日のキャンプを実施します。こうした非日常的活動には「たくましくなって帰ってきてね」「自分のことは自分でできるようになってほしい」と親の期待も高まります。けれど、当の本人である子ども達は、トイレがどうだった、食事がどうだったと、現実的で冷めています。

そんな中、いつものゴミ拾いの時、森から池の向こうの景色を見ていたひとりの子が「わあー、ぼくらはすごいきれいな所に住んでいるんやなあ」

とつぶやきました。心臓がドクンと鳴って涙がこみ上げてきました。決して忘れることのできない貴重な一瞬でした。

夏休みや冬休みになると、障害のある子ども達が狭い2LDKの私達の事務所に泊まりに来ます。みんなで家族のように過ごす毎日ですが、多い時には7人も8人もなり、同じ宿泊でもキャンプとは大違いの環境です。にも関わらず、皆結構ゴキゲンに過ごします。夕食作りに忙しくあわてている私をよそに、気づいたら子ども達だけでおやつを分け合って食べている・・・最高の笑顔で。ほぼマンツーマンでボランティアリーダーがサポートするキャンプでは見られない光景です。

今在る所や今在る仲間を愛おしむ心。これは人として生きていく中で最も尊くて幸せなものだと思います。それは案外「身近でささやかな」子ども達が安心して過ごせる時間の積み重ねによって育まれるのではないのでしょうか。子ども達が自信をもってなしとげることのできる小さなプログラムの中で、丁寧にそれぞれの生命と関わり向き合っていくことこそが、子どもたちの心のニーズに応えていくことではないかと思います。身近でささやかな楽しい出会いと新しい発見の中にある偉大な力を信じて、めっちゃオモロイ時間を子ども達と共に刻んでいきたいと思っています。

● 酒井 妙子 [さかいたえこ]

手づくりほいく研究会代表

1980年大阪女学院短期大学卒業後、大阪YMCAにて幼少期の体育、水泳指導を行い、この間ニュージーランドやアメリカなど海外の学童保育や障害者施設の視察研修を受け、大阪コミュニティワーカー専門学校障害児保育科に入学。卒業後保育士、病院や発達研究所での療育指導を経て、現在NPO法人子どもと遊びを育むまちづくりプロジェクトKid'sほけっと事務局長、大阪保健福祉専門学校保健保育科講師（「乳児保育」「子ども遊び指導」を担当）も務める。

自然の中で遊ぶちょっとしたコツ

身近な場所で気軽に楽しむ



関山 隆一

15年ほど前、私はニュージーランドの大自然の中でガイドとして働いていました。自然から多くのものを感じ、この地球で生きていく上で大切なことを学びました。

10年前に帰国してからは、日本の子どもたちと一緒に自然とともに生きることの大切さを体験し、「森のようちえん」という保育スタイルのもと、感性豊かな子どもたちを育む活動に取り組んでいます。

これからの「感性の時代」を生きる子どもたちにとって大切なことは、五感を使って感じることです。赤ちゃんでも外に行けば風を感じ、草木の匂いを感じ、季節の色を感じます。

とはいっても、具体的にどんなことをすれば五感をフルに使うことができるかイメージがわからない方も多いかもしれません。そういうときは、まず大人が同じ世界を感じることから始めましょう。自然を共感することでたくさんの不思議に気づき、その世界に深く入り込むことができます。

たとえば、芝生の上にどっかり座って深呼吸をしてみる。すると、草の中に小さな花が見えてきたり、ふだんは街の音でかき消されている鳥の鳴き声も聞こえてきたりします。

五感を研ぎ澄ます感覚を持つことができたなら、そこから広がる遊びは無限大です。

なにかを拾うのが大好きな子どもたちは、どんぐ

りや葉っぱなどいろんなものを拾ってきます。

一緒に拾ってお土産にして、あとで振り返りながらモバイルにしたり、木のフォトフレームに貼りつけるのもいいですね。

それから子どもたちは木登りも大好きです。一緒に木のぼりの木を探しに出かけてみるのもいかがでしょうか。得意げにどんどん登っていく子もいれば、慎重に少しずつ登っていく子もいるでしょう。

木登りには、ちょっとした「チャレンジの瞬間」があります。ここで大事なものは、自分で上がるうとしている瞬間に手を差し伸べないということ。子どもたちの成長のカギは「信じて待つ!」ということなのです。

そんなことも考えながら、子どもたちとの楽しい時間を過ごしてください。



● 関山 隆一 [せきやまりゅういち]

もあなキッズ自然楽校理事長

1971年神奈川生まれ。1998年ニュージーランドに渡航し、国立公園で現地ガイドとして働く。現地でシーカヤックのガイド資格を取得。2004年、帰国と同時にアウトドアオペレーター「もあなくらぶ」を設立。2007年に「もあなキッズ自然楽校」を創設。2013年森のようちえん全国交流フォーラム 実行委員長。2013年厚生労働省「社会福祉推進事業」有識者委員会メンバー及び研究プロジェクトメンバーに選出。2013年「こどもの未来を創造するソーシャルビジネス講座」のコーディネーターを務める。

自然の豊かさと 村人のあたたかさを感じる村暮らし

鍾水 愛

長野県最北端の村、栄村。毎年3m～4mの雪が積もる豪雪地域です。私の出身は、神奈川県小田原市ですので、雪が降らない場所から、約5ヶ月もの間雪が降る場所へと、NPO法人信州アウトドアプロジェクト（以下SOUP）の事務所移転をきっかけに、2013年5月より栄村民となりました。

キャンプを中心にアウトドアでの仕事を約10年してきましたが、自然と密着した暮らしをするのは初めてのことでした。『田畑を耕し、種を植え、食べるものを作る。』『山菜や、木の実や、きのこの等の山の恵みを頂く。』『厳しい冬のために干したり、塩で漬けたりして食べるものを保存する。』日々の暮らしそのものが、自然と共にあるのです。春の芽、夏の葉、秋の実、冬の根。その季節の一番美味しい旬のものを食べ、木々の葉の彩の変化を楽しむ毎日です。

栄村に来て、喜びを感じたのは自然の豊かさだけではなくではありませんでした。人のあたたかさを感じる暮らしがここにありました。村に住んでから「不便なことはないの？」と聞かれますが、そんなことを感じたことは1度もありません。買い物に行かなくても手元に届く野菜や山の幸、困ったことがあれば近所の人が助けてくれます。移住してから1年半が経ち、ここでの暮らしがとても合っていることに自分でも驚いているくらいです。

私は、栄村がとても好きになりました。自然の豊かさ、人のあたたかさを感じてもらおうと、昨年度からSOUPで『MURAGURASHI』という事業を、春、夏、秋、冬の年間4回実施しています。村の父ちゃんや母ちゃんに案内してもらって、山菜採りや、野菜の収穫、味噌作り等、その季節の村の暮らしを味わってもらおうプログラムです。



MURAGURASHIの事業で

また、今年は村で実施した子どもキャンプでも、父ちゃんに昔の遊び、母ちゃんには郷土食を教えてもらいました。これからも、村での暮らしを楽しみながら、たくさんの人に喜んでもらえる体験を広げていきたいと思っています。

● 鍾水 愛 [やりみず あい]

NPO法人信州アウトドアプロジェクトディレクター

1982年神奈川県生まれ。日本児童教育専門学校卒業後、小学生の頃から大好きだったキャンプの世界で仕事をしていくことを決意し、野外教育フリーランスとして様々なキャンプや、チームビルディングのファシリテーターとして活動。

2008年より、同年代の2人が前年に立ち上げたNPO法人信州アウトドアプロジェクト（SOUP）に参加し、自然体験活動の普及に力を注ぐ。震災をきっかけに2012年4月よりSOUP事務所を栄村に移転し、2013年5月より自身も栄村へ移住。



（雪深い栄村）

[葉っぱオバケ]と[はにゅ～選手]

身近な場所で気軽に楽しむ



瀧深 徹

ある夏のこどもキャンプでのこと。

子どもたちと山道を歩いていると、足もとに大きなホウノキの葉が落ちていました。私が一枚を拾いあげ、顔の横に並べて、

「どっちが大きい？」

「葉っぱ～」

そう言うと、子どもたちは我さきに、大きな葉を拾い始めます。そのうちに一人の子どもが、自分の目鼻にあわせて葉に穴をあけ、お面のように顔に当てて、「オバケだぞ～」

キャハハッと笑った後、子どもたちはそれぞれに、自分用のオバケ面を作り始めます。あたりは、あっという間にオバケたちの遊び場になりました。



また、ある秋の日、子どもたちと遊んでいた公園に、立派なスタジイの木を見つけました。木の下にはたくさんさんのどんぐりが落ちています。私が拾い集めてテーブルに並べると、子どもたちが寄ってき

て、「あっちにも落ちてたよ。」

広場のあちこちで拾うと、いろいろなどんぐりが集まりました。私がひとつをつまんでコマのように回して見せると、「どうやったの？」

私の真似をしますが、大きなどんぐりは子どもの手に余るようで、なかなか上手に回しません。

小さなものなら上手に回せることがわかったと、

どんぐりのコマ回し大会が始まります。

一人の子どもが、どんぐりに目と口を描きました。それをクルクル回して、

「はにゅ～選手！」(フィギュアスケートの)

それを見た別の子も、目と口を描いて、

「私も、はにゅ～選手！」

二人でどんぐりを回して笑い転げていました。



興味や遊び心を刺激するだけで、子どもたちの遊びはどんどん発展していきます。

注意深く見ていると、その過程に多くの発見や工夫や学び合いがあることに気づきます。身近にある自然と遊ぶ中にも、大きな学びがあるのです。

まず私たちが、膝を折って子どもたちと視線を合わせ、率先して遊び始めることが大切だと思っています。

● 瀧深 徹 [たきふか とおる]

有限会社 トップス代表取締役社長

1959年生まれ。筑波大学大学院体育研究科修了。野外教育学専攻。体育学修士。

1993年、自然体験活動、野外教育活動を企画・指導する(有)トップスを設立。多様な世代にハイキング、キャンプ、ネイチャースキーなどの活動を提供する傍ら、大学、専門学校等でレクリエーションや野外教育学を指導する。

NPO法人埼玉県キャンプ協会常務理事、同協会広報委員会委員長。



平成26年度:アウトドアゲーム指導法講習会 紅葉の磐梯高原で 「2泊3日コース」を開催

子どもたちが「自然に触れ親しみ、自然を知り、自然に学び、自然の不思議さや美しさなどに気づく」自然体験活動の楽しい指導方法を、パッケージド・プログラム（アイオレシート）による実習を通して学ぶ、指導者講習会(28回め)を、平成26年10月11日(土)~13日(月)、福島県の国立磐梯青少年交流の家で実施しました。文部科学省のほか、公益社団法人日本キャンプ協会の後援を得ました。

参加者は、1都1府8県から22名（男性14名、女性8名）。大学生のほか、青少年教育施設職員など社会教育関係者、保育・学校教育関係者、民間の青少年健全育成等に携わる方など、20代~50代にわたる。

指導講師は、平野吉直（信州大学教授）、瀧直也（淑徳大学准教授）、鶴川高司（有限会社 掌 代表）、野口和行（慶應義塾大学体育研究所准教授）、荒牧光子（遊び塾はらっぱ主宰）、北原澄高（中央大学講師）の6氏。講師・補助スタッフ・研究所員は、前日に現地入りして、実踏と準備を行った。

講習第1日/10月11日(土)

この日は、やや強い風が吹くが快晴。

開講式の後、施設本館へ続くアプローチの傍の芝地に移動し、北原・荒牧講師の指導でアイスブレイクを行いました。磐梯山がくっきりと見えています。



参加者の緊張を解く



【課題解決型ゲームの指導】

4グループに班分けして、6つのゲーム（アクティビ

ティ）を実習。参加者は知恵を出し合い、協力して課題に挑戦します。活動を通して、親近感が高まり、グループの結束力も強まりました。

①「リバー」平野講師

人がなんとか乗ることができる長い板2本とブロック3個が用意され、これらを使って急流の川を渡り、島にゴールするという設定。

【受講者の感想】 一人一人が意見を出しあい、どんな意見でも一度実行して改善策や最善策をさぐり協力し合う中で、チームの団結力がより深まっていった。用具さえ揃えられれば、自分の職場でも活用することができる。(茨城県:コバシヨウ)

②「大脱走」鶴川講師

木の幹と幹とに張られたテープの隙間（セル）に入り、テープには触れずに次のセルに移動します。全員が指定された出口から脱出できれば課題達成。



テープに身体の一部が触れるとやり直し

③「おじゃまします輪」瀧講師

自転車のチューブ（ゴム）を道具として使用。全員が円となり、右手でゴムをつかみます。一人ずつ「おじゃまします」と言って順にゴムの輪をくぐり、全員が輪をくぐり抜けられれば、課題はクリア。

【受講者の感想】 ゴムを伸ばす力加減や他の人の身体に触れていなければならないなどのルールのために、チーム内のコミュニケーションが多くなり楽しいと思いました。メンバーそれぞれの個性や性格がでやすく、

キャラクターや班での役割が分かりやすかったです。
(兵庫県：あっこ)

④「地球防衛隊」 荒牧講師

2つの同心円が地面に描かれ、中の小さい円は病気が蔓延している地球、外の円との間はブラックホールです。1人が1つボール（地球を救う薬のカプセル）を持ち、外側の円の外から地球に投げ入れます。次にボールを回収し、すべて取り戻すと、地球は救われて課題は達成です。



ブラックホールには足や手はつけない

8

⑤「目かくし列車」 北原講師

目かくしをして縦1列に並びます。最後尾の人は目かくしをせず、運転役になります。フィールドの木には番号があり、順に木に触れていき、ゴールをめざします。言葉は使用できないが、音や意味のない言葉は使用できます。1つの木（番号）に到着するごとに、指示を出していた人は先頭へ移動して運転役が交替します。

[アイオレシートN0.62]

【受講者の感想】 以前体験した時は、先頭の人が目かくしをして誘導するパターンだったので、後から最前列を見て誘導するのは勝手が違うが発見も多かった。サイレントでどうサインを出すか、どうやってそれを共有ルールとして定着させるか戸惑った。普段いかに言語のコミュニケーションに頼っているかが実感できた。(千葉県：みら)

⑥「くじらの噴水」 野口講師

ブルーシートの端を全員が持ち、中に入れたボールをはね上げて、落ちてきたボールを手でキャッチします。成功するとボールを1つずつ増やし、20分間でいくつキャッチできるかにチャレンジした。

🌲【ナイトゲームの指導】 瀧講師

「見れば見るほど、な—るほど」 [アイオレシートN0.4]

夕食後、集まって芝生の広場へ移動。気温8度、夜は冷え込んで、星がよく見えます。

グループ分けをし、広場を中心に周囲を眺めて、木々のシルエットなどが作り出すものの形にイメージを膨らませ、何に見えるかを想像して発表する活動を行った。きつつき、馬の顔、わしなどを発見。

講習第2日／10月12日（日）

一日中快晴。3つの分野（自然学習・自然体験・創造イメージ）のゲームを、参加者は3つのグループに分かれ、午前中に2つの分野、午後に残り1つの分野のゲームを実習した。

1. 自然学習型ゲーム 野口・瀧講師

森の端で、付近の植物などいろいろな自然物を観察して、観察力や想像力を高める活動を行った。

①「ちょっとだけよ」 [アイオレシートN0.52]

「ちょっとだけ」シートをよく観察し、小窓やスリット（切れ目）から見える中の植物の一部から、これだと思ふ植物を周辺から探してきます。シートの中を開いて適合しているかどうかを見比べて、その結果を発表し合います。

次に、グループごとに、フィールドで特徴のある植物、紹介したいと思う植物を選んでシートに作成し、相手グループに探してもらいます。



「ちょっとだけ」シートの内側を開くと…

【受講者の感想】 植物の部位を観察して探すという新鮮な活動でした。ちょっとだけしか見えていない部分で特徴をとらえると、葉の様子とか花のつき方とか、普段は意識しないこともじっくり観察できると感じま

した。(長野県：でこぼん)

② 「ねっこほじほじ」 [アイオレシートNO.46]

グループごとに植物を1つ探し、地上部(茎や葉、花や実)を観察してスケッチし、地中の根も想像して描きます。次に石や枝など自然物を使い根を切らないよう慎重に掘り出します。根の形や色などをよく観察し、想像して描いたものと比較します。

2. 自然体験型ゲーム 鶴川・荒牧講師

自然の中で、思いっきり身体を動かして走りまわったり、周辺の自然物を使ってももの作りをする楽しさなどを味わう活動。

① 「立木取り」 [アイオレシートNO.32]

グループによる活動。長短何本かのヒモを用意。2人1組で手をつなぎ、ヒモが結べる木を探し、片手ずつで「蝶々結び」で巻き付けます。リレー形式ですべてのヒモを先に結び終わった方が勝ち。次に相手の結んだヒモを探し、ほどいて持ち帰ります。

② 「森のレストラン」 [アイオレシートNO.34]

周辺の自然の中から集めた素材(植物の花や実、落ち葉や枯れ枝、こけなど)を使って料理を作る活動。今回のメニューは大人向きに「男の心をつかむ女の料理」。出来映えを発表しあいます。

【受講者の感想】 自然にあるものを使って料理を作るのはとても楽しかった。チームでどんなものを作ろう、これは何に使えるだろうか、イメージをふくらませながら話をするのにワクワクしました。シェフになって作った料理の説明をするのも、イメージの共有になった。(大阪府：たりさ)

3. 創造イメージ型ゲーム 平野・北原講師

自然の中で、目的をもって見つけものをする楽しさを味わったり、自然のものを使って、想像力をふくらませて、創作・表現をする活動です。

① 「三位一体」

2グループによる活動。色、形、手ざわりの内容が書かれたカードをひき、3つの条件にマッチする自然物を探し出し、発表します。

【受講者の感想】 色、形、手ざわりという限られた条件をつけた中で自然物を探すことにより、普段よりも細かく見ることができた。自然を観察するマクロな視点とミクロな視点での気づきの違いを理解しやすい活動だった。(千葉県：まる)

② 「いろいろ紙芝居」

前の活動の「三位一体」で見つけた自然物を主人公としてストーリーを組み立て、6枚の紙芝居を作成します。でき上がった紙芝居(作品例：葉っぱのほくの一生涯)をグループごとに発表し、鑑賞します。



紙芝居の発表の始まり

🌲 【ゲーム創作と情報交流会】

創作方法とポイントについて、野口講師が説明し、5つのグループに組み分けし、4～5時間の短い時間に集中して創作しました。提出後の情報交流会は、北原・荒牧講師が司会し、参加者どうし、参加者と講師との懇談・情報交換の場となりました。

講習第3日/10月13日(祝)

🌲 【創作ゲームの発表会】

台風の影響が始め、くもり時々雨。芝生広場を中心に創作ゲームを各20分の持ち時間で発表した。

自然体験型は「集めて薫って 触れ合って」

「宝島へGO! 橋を作ろう」の2作。

自然学習型は「食べ跡ウォッチング」

課題解決型は「ゴッドハンド」

創造イメージ型は「ミクロな世界 みーつけた!」

創作ゲームに対する各講師からの講評後、第6研修室で閉講式を行い、昼食後、解散しました。

平成27年度アウトドアゲーム 指導法講習会予告

日にち：平成27年10月10日(土)～12日(祝)

場所：国立赤城青少年交流の家(群馬県)



アウトドアゲーム指導法講習会 長野県で「1日コース」を開催

報告:吉田 理史

🌲 開催概要

今年度は、2泊3日で行う従来の講習会に加えて、初の試みとして、日帰りの講習会を長野県内の2つの会場で開催しました。

主催は公益財団法人日本教育科学研究所ですが、実務はNPO法人信州アウトドアプロジェクト(SOUP)が共催して進めました。

周辺地域はもとより遠方からの参加もいただき、アイスブレイクゲーム、アイオレシートのゲーム各種を体験していただきながら、自然体験活動の指導ポイントについて理解を深めました。

【第1回】

日時：平成26年10月31日（金）9:00～16:00
会場：国立妙高青少年自然の家（新潟県妙高市）
天候：曇り
参加者：11名（一般6名、大学・大学院生5名。
男性8名、女性3名。長野県内10名、長野県外1名）

【第2回】

日時：平成26年11月9日（日）9:00～16:00
会場：長野市青少年錬成センター（長野県長野市）
天候：曇りのち雨
参加者：12名（一般10名、大学・大学院生2名。
男性4名、女性8名。長野県内9名、長野県外2名）

講師 平野吉直、鎌水 愛、吉田理史

実施ゲーム：移り木、一番星、人間知恵の輪、目隠し列車、ミクロの世界見つけた、森のレストラン、スカイライトギャラリー、「ちょっとだけ」よ、カメレオンゲーム

🌲 講習時程

09:00 開会式
アイスブレイクゲームの紹介
09:45～ 課題解決型ゲームの紹介
・「移り木」、「一番星」、「人間知恵の輪」
10:30～ 自然体験型ゲームの紹介

・「目隠し列車」
自然学習型ゲームの紹介
・「ちょっとだけよ」
創造イメージ型ゲームの紹介
・「スカイライトギャラリー」
・「ミクロの世界見つけた」
・「カメレオンゲーム」・「森のレストラン」
15:30 まとめ、閉会式

🌲 講習内容

開会式で講習会の目的やアイオレシートに関する説明を行った上で、屋外に場所を移しました。

曇り空に紅や黄の色彩が映える森の中で、まずはアイスブレイクゲームの体験です。ジャンケンや自己紹介を含むゲームを通して、心と身体の緊張がやわらぎました。

その後、2グループにわかれて課題解決型（イニシアティブ）ゲームの体験です。提示された課題の解決方法をグループ内で模索しながら、積極的



空に映るものは…?!「スカイライトギャラリー」

に取り組みました。課題の設定によって難易度がかわることや指導者としてどのような言葉がけをしたらいかが等の解説を交えながら進めました。

課題に向き合う時間を通して、参加者どうしの気持ちや考えが共有できたようです。

続いては自然体験型、自然学習型、創造イメージ型の各種ゲームです。

自然体験型ゲームとして行った「目隠し列車」は、目隠しで見えなくなった森の中を、グループメンバーの誘導で目的地まで歩くものです。落ち葉や地面の起伏等による足裏の感覚が研ぎ澄まされました。

自然学習型ゲームの「ちょっとだけよ」は、自然物のある一部分だけをチラッと見て、それがどのような自然物なのかを観察しながら探し当てる内容です。自然物のどの部分を見せるかがポイントで、自然物の特徴をじっくり観察しながら行うことができます。

創造イメージ型のゲームは4種類行いました。

「スカイライトギャラリー」は、テーマをにそって自然物を使って光を通すシート上に絵を描き、下から眺めて楽しむ内容です。今回は鮮やかな自然物が多く使われて彩り豊かな作品になりました。

「ミクロの世界見つけた」は、例えば、コビトの目線になったつもりで自然物を見つめる内容です。今回は、「乗り物」と「家具」をテーマに自然物を集めました。創造豊かでユニークなモノが集まりました。

「カメレオンゲーム」は、森の中のある範囲内に文房具で作成した生き物を自然に溶け込むように置き、探し当てる内容です。見事に色や形にカモフラージュされ、見つけることができない生き物もありました。

「森のレストラン」は、自然物だけを使い、提示されたメニューの料理を作る内容です。今回は、「特上

寿司〜和風デザート添え〜」、「スペシャルエビフライ定食〜秋のデザート添え〜」を作りました。

細部にわたってこだわりを持った美味しそうな作品ができました。昼食後でも食べたくなってしまふほどの完成度でした。

参加者の声

- 作ったり発表したりするゲームが主でしたが、自然を介するとこんなにも面白くなるものかと思いました。
- ゲームを重ねる度にグループの人との会話が増え、たくさんコミュニケーションを取りながらできたところがよかったです。
- 雪の時期にできるアクティビティがあれば、ご紹介いただけると嬉しいです。
- ゲーム自体もいろいろな工夫がされているなと思いました。
- 身の回りに少しの自然があれば子どもたちに是非体験させてあげたいゲームばかりでした。
- 自分の現場でもそのまま活用できるもの、少し置き換えて活用できるものなどイメージしながら参加できました。

講習会を終えて

両会場ともに、曇りまたは冷たい雨が降る晩秋ならではの天候となりましたが、予定のプログラムを実施することができました。

今回の1日コースの講習会は、参加者ができるだけ多くのゲームを体験して学んでいただけるように設定して開催しました。

短時間ではありましたが、目的に応じたゲームの指導方法を含めてアイオレシートの要点を一通り理解していただけたと思います。

また、参加者にとってはより気軽に参加できるメリットがあったようです。

アイオレシートをより多くの方に活用していただくために、今後も各地でその環境に応じた形態で実施されていくことを期待しています。

● 吉田 理史 【よしだ よしひみ】

NPO法人信州アウトドアプロジェクト

1983年栃木県出身、信州大学大学院卒業、長野県栄村在住。



ホンモノそっくり! 「森のレストラン」

「身近さ」や「気軽さ」が大切

金山 竜也

アイルランド・ダブリンの市街地から車で数十分、Barretstownという小さな町に小さなお城があります。ツタに覆われた城の建物の横には、堀に囲まれた西洋庭園、なだらかに広がる丘では羊や馬がのんびり草を食べています。かつて馬小屋だった建物には医務室やネイチャーラーム、別の建物には売店や食堂、小さな劇場もあります。視点を遠くに移すと、コテージや背の高いロープスクールの設備が見えます。

実はこれ、ガンなどの重たい病気の子どもたちを対象としたキャンプ場なのです。年間2,000人以上がこのお城にやってきて特別な楽しい時間を過ごし、病気やその後遺症と寄り添って生きていくための強さ（レジリエンス）を身につけて、日常に戻っていきます。

東京を拠点に考えると、1時間以内に行ける場所で、これほどの恵まれた環境はとても望めません。キャンプなどの自然体験活動の人の成長に与える影響の大きさをおもうと、近くにこんな場所があることがうらやましくて、ため息が盛大にこぼれました。

「近さ」というのは、距離的なものであっても、心理的なものであっても、けっこう重要なだろうとおもいます。触ったり、匂いをかいだり、肉眼で見たり、顔をあわせてしゃべったり、直接に体験することでしか感じられないものがあります。

そう考えると、都心に近く、万全の環境が整ったBarretstownは、とてつもなくうらやましい場



所なのです。とはいえ、触ったり、匂いをかいだり、見たり、しゃべったりすることの意味の大きさは、必ずしも場所に依存するわけではありません。今回の特集に寄せられた文章を読むと、「身近さ」や「気軽さ」が大切であることに改めて気付かされます。

体験の質感は、環境を反映して変化します。だから、近所の公園での体験と、日常から切り離されたキャンプ場での体験は違うものになります。偶発的な体験と、きちんと計画されたプログラムとしての体験も、また違ったものになるでしょう。けれどそれは、必ずしも質の良しあしを決定するものではありません。そこに「共有の瞬間」が生じれば、身近で気軽な体験もとても豊かなものになります。少なくとも、身近で気軽な体験のほうが「数」を稼げる可能性は高いわけで、悔るわけにはいきません。

もっとも、「Barretstownのような場所が近くにあるといいなあ」という気持ちはそう簡単に消せるはずもなく、「誰か50億円くらい、ホーンとくれないかなあ…」と愚にもつかぬことを考えているのです。

● 金山 竜也 [かなやまたつや]
公益社団法人日本キャンプ協会事務局長